

英語における「聞くこと」・「書くこと」を めぐる問題

武田 和 恵

(文教大学文学部)

Some Problems in Listening and Writing Activities in English

TAKEDA KAZUE

(Faculty of Language and Literature, Bunkyo University)

要 旨

平成13年度実施教育課程実施状況報告書で報告されている英語に関する学習の実現状況をみると、「読むこと」の領域では「おおむね良好な」実現状況が見られるのに対して、「聞くこと」「書くこと」の領域では、「おおむね良好とはいえない」状況がみられる。本稿では、出題された問題の形式や生徒・教師への質問紙調査の結果も含め、「聞くこと」「書くこと」の領域における学習の問題点に関して考察する。

[調査の概要]

平成元年公示の学習指導要領では、「外国語を理解し、外国語で表現する基礎的な能力を養い、外国語で積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てるとともに、言語や文化に対する関心を深め、国際理解の基礎を培う」こと、「聞く・話す・読む・書く」の各領域において、第1学年から第3学年まで段階的に各言語活動に「親しみ、興味を育てる」「慣れ、意欲を育てる」「習熟し、積極的な態度を育てる」ことを目標に掲げている。

今回の調査は、教科ごとのペーパーテストと生徒及び教師を対象とした質問紙調査(生徒の学習への意識・教師の指導の実際など)から構成され、各教科1学年当たり3種類の問題冊子(ほぼ同程度の内容、水準)が用意

された。調査対象は国立教育政策研究所が対象学級を無作為抽出し、当該学級の生徒全員を対象とした。英語の学年別の調査学級数・人数は、第1学年1,293学級42,740人、第2学年1,415学級46,102人、第3学年1,475学級47,260人である。ペーパーテスト・質問紙調査の実施時間は各50分であり、調査の性質上、「話すこと」を除く3つの言語活動の状況について調査が行われた。

[調査結果について]

評価の基準は、問題ごとの設定通過率(標準的な時間をかけ、想定された学習活動が行なわれた場合に予測される通過率)と実際の通過率(問題ごとの正答、準正答者数の合計を解答者数の合計で割った数値)を比較し、

設定通過率を中心に上下5%の幅に入っていれば、「設定通過率と同程度」、その幅を越えていれば「設定通過率を上回る」、その幅に達していなければ「設定通過率を下回ると考えられるもの」と判断される。さらに、教科、学年ごとに「設定通過率を上回ると考えられるもの」と「同程度と考えられるもの」の合計が半数以上を占めていれば、学習の実現状況が「おおむね良好」、もし「下回ると考えられるもの」が過半数であれば、「おおむね良好とはいえない」と評価している。

この評価基準を踏まえて、英語の調査結果を検討していく。表1では英語に関して学年別にみた問題ごとの設定通過率と実際の通過率が比較されているが、第1・2学年では学習の実現状況が「おおむね良好」なのに対して、第3学年では「設定通過率を下回ると考えられるもの」が過半数を占め、実現状況が「おおむね良好とはいえない」結果である。

	問題数	上回る (a)	同程度 (b)	(a)+(b)	下回る	通過率 (%)	設定通過率 %
第1学年	71	16	21	37	34	62.3	68.0
第2学年	75	26	20	46	29	63.7	66.2
第3学年	81	18	18	36	45	56.3	63.9

表1 学年別にみた問題ごとの設定通過率との比較

また、平成6～7年に行われた前回調査に使用された同一問題の通過率との比較を学年別に検討すると、第1学年では通過率が前回は有意に下回る問題が過半数を占め（15問中10問）、第2学年では有意に上回る問題と同程度の問題が同数（19問中各7問）、第3学年では前回は有意に上回る問題が過半数（17問中9問）を占めている。さらに得点別にみた人数分布や平均得点別にみた学級分布では、学力の二極化の状況は観察されない。

質問紙調査にみられる特徴およびペーパーテストの得点との相関をみてみると、生徒を対象とした調査では、50%前後の生徒が英語の勉強が好きだと感じており、また80%前後

の生徒が英語の勉強は受験に関係なく大切だと感じている。そして、「好きだ」「大切だ」あるいは「社会に出てから有益だ」「将来の仕事に役立てたい」と感じている生徒の得点はそう感じていない生徒の得点に比べ高い傾向がある。また、教師を対象とした質問紙調査に関しては、「宿題を出すか」「視聴覚機器を活用した授業を行うか」「理解の不十分な生徒に対し授業外に更に指導を行っているか」などの設問に対して、積極的な回答をした教師が担当する生徒の得点は、そうでない教師が担当する生徒の得点に比べ、高い傾向がある。

以上が一般的な状況であるが、設定通過率に対する実際の通過率の状況は言語活動の領域により異なっている。領域別にみると、「読むこと」は学年を通して設定通過率と同程度と考えられる結果となっている（第1学年：61.9/66.6 [通過率(%)]/[設定通過率(%)]、第2学年：63.9/64.5、第3学年：61.4/65.5）。これに対して、「書くこと」は学年を通して設定通過率を下回ると考えられる結果（第1学年：44.3/58.8、第2学年：37.4/53.8、第3学年：38.2/57.9）で、「聞くこと」では第1・2学年では設定通過率と同程度と考えられる結果（第1学年：71.2/73.6、第2学年：77.8/75.2）であったのが、第3学年では設定通過率を下回ると考えられる結果（第3学年：58.9/64.7）へと変化している。「聞くこと」と特に「書くこと」の領域で、実現状況の改善に向けて問題点を明らかにする必要があることがわかる。

そこで、領域ごとに問題のタイプ別の数値を検討すると、「読むこと」については、「詳細理解問題」「概要・要点理解問題」「談話構造理解問題」「言語使用に関する知識理解問題」のうち、全学年について「詳細理解問題」「概要・要点理解問題」は、設定通過率を上回るともしくは同程度と考えられるものの合計が該当する問題の半数以上である。

「聞くこと」については、「応答問題（英問英答）」「詳細理解問題」「概要・要点理解問題」のうち、「詳細理解問題」「概要・要点理解問題」では、全学年において通過率が設定通過率を上回る又は同程度と考えられるものの合計が全体の半数以上となっており、「応答問題」の全般的な通過率の低さと対照的な結果となっている。ここで注目したいのが、出題形式である。「応答問題」は英語での問いかけに対して、問題用紙に提示された4つの英文選択肢から正答を選ぶ形式、「詳細理解問題」は提示された絵の内容に合致するものを4つの英文選択肢から聞いて選ぶ形式、「概要・要点問題」は英語の会話を聞いて、問題用紙に書かれた日本語の問いに対する正答を4つの日本語の選択肢の中から選ぶ形式である。「聞くこと」に関する問題では、「何に注意して聞いたらよいのか」という手がかりの有無により理解の度合いに差が出ることが報告されている。内容に関する視覚的情報や質問文が予め与えられていると像を結びやすく理解を促進するのである（Ginther 2002^{注1}、Buck 1991^{注2}等を参照のこと）。今回の調査の「応答問題」では、会話の文脈・状況は短い日本語で提示されているが、会話の内容はテープから聞こえてくる英文と問題用紙上の英文選択肢のみから把握せねばならず、通過率の低さを生んでいると考えられる。また、わかりづらい視覚情報は理解を妨げる可能性もある。今回の調査で使用された絵についても、意図された情報が読み取りにくい場合通過率が低くなる傾向がみられる。どんな要因が「聞いて理解すること」を促したり妨げたりするか、更に研究を深め、評価のためのテストや授業に生かすことが望まれる。

通過率が低い「書くこと」の領域では、「トピック指定問題」「条件指定問題」「文構造理解問題」があり、どのタイプでも全ての学年で、設定通過率を下回ると考えられる問題の数が全体の問題数の過半数であるか、も

しくは過半数を超えている。「文構造問題」は与えられた幾つかの語を並び替えて文脈にあった文を作る「整序問題」であり、無解答率は10%前後だが、語順間違いを含む解答の多さが目立つ。「トピック指定問題」は与えられたトピック（「趣味」など）について3～4文以上の英文を内容を考えて書く課題であり、「条件指定問題」は指示された条件や文脈に合うように英文を書く課題である。指定されたトピックや条件によって上下するが、どちらのタイプでも、通過率は設定通過率を10%～30%下回っている。さらに特徴的なのは無回答の多さである。「聞くこと・読むこと」の領域で3、4%であった無解答率が、この二つのタイプの問題では30%～40%に増加している。

「トピック指定問題」は「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」を図る唯一の項目として分類されているが、無回答率の高さを「意欲の欠落」と解釈すべきかは、検討を要する。今回の調査では、解答時間が充分かどうかについて設問が無いので、他の問題（「読むこと」の領域）が「書くこと」の問題を解く時間をどの程度圧迫したか判然としない^{注3}。また、内容を自分で考えて書くことが、様々な知識の統合を必要とする能動的な言語活動であることを考えると、「意欲」は充分ありながら「書くこと」に結び付けられない生徒も多いと考えられる。生徒への質問紙調査で「外国人が英語で話しかけてきたら、どうしますか」という設問に対して、どの学年でも50%～60%の生徒が「英語で受け答えする」と答えており、「外国の生徒との英語でのメール交換の紹介があったら、どうしますか」という設問に対して、どの学年でも積極的な回答が50%～60%程度みられる。その一方で第2・3学年では「自分の言いたいことが英語で書けるようになる学習」を「よく分からない」「きらい」と感じる学生の割合はそうでない学生よりも多い。これは、「外国

語で積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度」は個々の生徒の中に育ちつつあるが、学習の場において「意欲」を具体的な状況に即して表出する機会を多く提供し、実際に表現することへの心理的構えを低くするとともに、「書くこと」の領域において段階的に力を伸ばし達成する喜びを生徒に実感させる必要性があることを示唆していると思われる。

最後に、教師が「生徒が興味を持ちにくい」と感じている「英語でかかれた内容が読み取れるようになる学習」に関して生徒は「よく分かった」「好きだ」と感じている回答の率が比較的多く、教師が「生徒が興味を持ちやすい」と感じている「英語が聞き取れるようになる学習」「言いたいことが英語で言えるようになる学習」に関して「よく分からない」「きらい」と感じている生徒が比較的多い、という認識のズレは検討を要する問題であろう。今回の調査報告書では、このほかにも英語学習に対する生徒・教師の意識に関して理解の深化を促すようなデータが多く含まれている。これらのデータを仔細に検討して個々の教師が其々の教育現場で直面している問題点の分析・改善に役立てることが望まれる。

注 -----

1 Buck, Gray. “ The testing of listening comprehension: an introspective study ” in *Language Testing* 8(1), 1991, pp.67-91.

2 Ginther, April. “ Context and content visuals and performance on listening comprehension stimuli ” in *Language Testing* 19(20), 2002, pp.133-167.

3 今回の質問紙の中には含まれていないが将来的に必要と思われる項目として、各生徒がおかれている言語環境（家庭での使用言語など）や英語圏（もしくは日本語以外の言語圏）での生活年数などに関する設問が考えられる。現時点では異論もあるかもしれないが、学習の実現状況をより正確に把握するために、他言語との接触状況を考慮する必要が今後徐々に高まっていくと思われる。